

西田幾多郎の哲学——「場所的論理」と「平常底」

石崎 恵子

平常底——自由、道徳、学問が成立する立場

西田が多用する語に「自由」という語がありますが、これは西洋における自由とは何らか違うものがあるといえます。西田は、真の自由は何物にも、とりわけ主語的なものに捉われない所にあると主張しました。つまり自己意識からも解放されているという事を真の自由だと言うわけです。最晩年の著作にあっては「平常底においてある」という言い方をします。そして今回中心的に論じたい、この「平常底」という立場は「我々にとって本質的な一つの立場」であり、ここにおいてこそ道徳と科学及び学問が成立するのだと言われるのです¹。

西洋哲学との関連

「平常底」という言葉自体は、「平常心」や「日常的」ということですが、これを西田は「絶対現在の意識」が成立する立場だと言っています。西田は言います「故に、これを深いといえど何処までも深い、そこに世界の底の底まで徹するといえることができる。これを浅いといえど無基底的に何処までも浅い、表面的にすべてを離れている、あるいはすべてを包んでいるといえることができる。」²そして、「平常底は常識と混同されてはならない」と言われます。「常識という因習的なドクサとは峻別されるべき」でありながら、「平常底があるからこそ常識というものも生まれるのだろう。この意味においてフランスの Bon sens に興味を有するものである」とも述べています。そしてまた、この平常底はどのようにして成立するのかといえど、「絶対現在の自己限定としてある」ことによって、なのでありますが、これは、西田によれば「パスカルの周辺なくして至る所に中心を持つ球体」という表現が、正しく示していると繰り返し述べています。「絶対現在」とは、初期には「永遠の今」という語で示され、定義としては「永遠の今 nunc aeternum」と考えられるものは、エックハルトの云ふ如く無限の過去と無限の未来とが現在の一点に於いて消されると考えられるものでなければならない、神は創造の始の日の如く今も尚世界を創造しつつあり、時はいつも新に、いつも始まる」という説から議論を展開していきますし、そもそもこの自己限定とは「場所的論理」の用語であり、場所的論理の最初の着想を得たのは実は「(前著を書き終えた時から)意志の根底に直観を考えていた、働く事は見る事である」というようなプロティノスの考えを持っていた」というように、プロティノスからであると述べていますので、この点について

でも識者の方々のご意見をうかがえれば嬉しく思います³。

神秘哲学と西田哲学の関係

このように、西田は、西洋哲学の中でも、神秘主義的な洞察を備えたものを高く評価しています。しかしそうでありながら自身の哲学は決して神秘主義ではないと述べるのです。その理由の要点が「平常底」にあります。言わば西田は、神秘主義の系譜こそが何らか真理を言い当てている事を見つつ、それは真理であるからこそ、解明不可能なものではない、現実的なものだ、という事を示そうとしたということになるでしょう。従来神秘とされてきたことに常に裏打ちされる形であまねくものが存立していると主張するわけです。理性の越権的誤用を避ける立場や、あくまで世俗を超越した神聖な次元を大切にす立場、双方それぞれに深く妥当な理由がある事は私も了解しておりますが、西田がこのような立場を取る事の意義、つまり神秘を神秘ではなく論理化することによって一体どのような考察が可能となるのか、その事の方から問う試みをしたいというのが本発表のねらいであります。

学問的方法としての場所的論理

例えば、意識や心の解明という観点があげられます。統合失調症やアスペルガー症候群といった精神医学への応用の試みもあります。これは西田哲学が意識の底に他なるものを見出すという構造を持つことや、対人の場面において共感とは別の形のもうひとつの方法が説明されていることにあります。そもそも、西田哲学は情というものを汲み取るべく構想されています⁴。

また、「ニュートンの絶対時間・絶対空間という如きものも今日の物理学からみればドクサであったと言えるであろう」と述べていますが、これは『永遠の今の自己限定』という論文においても述べられているように、対象化した上での抽象の産物であるという事をもって限定されたドクサであるという論旨であり、その点で、相対性理論もまた、カント的な対象論理の成果であると述べる一方で、量子力学の方が、場所的論理の立場を示していると述べています。この発言がどれだけ意味のあるものなのかについても現在私は研究中ですが、例えば、理論物理学者であるロジャー・ペンローズによれば、人工知能が単なる計算機によつては再現不可能であることが、自己言及を数理的に扱う事のできる対角線論法、及びその方法を使って導き出されたゲーデルの不完全性定理に基いて証明され、対案として量子物理学に可能性を求めているそうです⁵。西田自身も、この対角線論法を考案したカントールにしばしば言及しており、カントールが提出した無限論への一つの対策として提出さ

れたとも言えるラッセルのタイプ理論についても、「個物的多の自己限定」が無いがため、尚不十分であるとの見解を述べており、同様の地平を巡る議論である事は明らかであります⁶。この「個物的多の自己限定」とは、ライプニッツのモノドロロジーの立場であるとも述べているように、唯一的な個別性を示すものであって、これも絶対現在の自己限定の一側面であります。このような個は、「絶対的一者の自己否定」によって成立するために、神秘主義ではないとも述べます。

場所的論理とは

さて、このように対案として有力である事を自負して止まなかった場所的論理とはそもそも如何なるものでしょうか。場所的論理の特徴を挙げますと、1、以下のいずれでもありません。対象論理、形式論理、抽象論理。・・・それでは何であるのか、と言いますと、2、「場所の自己限定である」ということになります。ということはつまり「何があるか」ではなく「何においてあるか」を問題とする、ということになります。そして3、「場所」とは、プラトンの『ティマイオス』に述べられている「コーラ」から着想を得たと明記しつつ「場所」はそれとは異なり、プラトンの善のアイデアも限定されたものであるため、「アイデアも場所においてある」と述べています。注意したいのは、場所は物理的な空間のみならず、主語と述語の関係でいえば、述語であり、つまり概念をも指すものであります。抽象概念が成立するのは、「一般者の自己限定の対象化」によってであります⁸。ですから、対象論理はその自己限定の契機として場所的論理に含まれているので全く相容れない立場ではないという事も重要です。そしてこの場所自体は究極的には「無」となります。それが絶対無の場所と言われます。何者にも限定されないにも関わらず現に限定されているという事実を見るのです。この「絶対無の場所」が時間的な表現を取るとき「絶対現在」となるわけです。ここにおいて、アイデアとコーラとが齟齬無く融合できるのは、対象論理を脱することによってであるというのが西田の主張です。そしてこのように、それ自身が、自己自身が、何において有るのか？を問うわけですから、必然的に、絶対否定・即・肯定となるという仕組みです。これがおかしいことだと見えるのは、対象論理の立場からであると繰り返し述べるわけです。

以上のようにして西田哲学においてはたとえば、時間は無時間においてある、つまり永遠の今の自己限定であるということになるわけなのです。

倫理と場所的論理——平常底

このような場所的論理において、根幹に関わる部分で「自由」という語が出てきます。今回はこの点を倫理の問題として扱ってみたいと思います。「自己の底に自己を限定する何物もない。主語的に本能的なものもなければ、述語的に理性的なものもない。何処までも無基底である。故に正にこれ平常無事、即ち平常底という。而して隋所に主となれば立つ所皆真なり」というのである。ここに何処までも西洋的なものの極限においてのカントの人格的自由と、東洋的なものの深奥においての臨済の絶対自由の対照を見ることが出来る」などというわけですが、果たして「絶対自由」などと言ったときに、その世界はどのようなものになってしまうのでしょうか。西田は、親鸞の「罪惡深重煩惱熾盛」「惡人正機」を頻繁に引用します。「道徳的意志には自己矛盾がある。道徳の極致は、道徳自身を否定するにある」とも述べます。しかしそのような世界観にあってなおも道徳が成立すると言い得るのが、「平常底」の立場だということです。「終末論的に平常底」の「終末論的」とはキリスト教的な意味ではないと述べています。その理由は、西田によれば、一瞬一瞬が終末であり、始まりである、アルファでありオメガであるという意味だからです。この「終末論的」という語の意味を説明するために挙げているのが、ドストエフスキーの世界観と、中国の禅僧である臨済の記録にある「全体作用」についてです。前者において西田が特に言及しているのは、『カラマゾフの兄弟』における「大審問官」の件です。しかし、ドストエフスキーをはじめ、西洋の精神は平常底に達していないと述べています。一方終末論的でありながら、絶対の無において主語的なものを無くしているがために平常底にまで達している、とされるのが、臨済の例でした。例えば「全体作用」とはこのような文脈にあります。「君たちは諸方で、この臨済というオヤジのことを聞いて、出てきて問答を挑み、一つとつちめてやろうとするが、わしに本体丸出しで対応されると、君たちはぼかんと目をあけたまま、口はさっぱり動かせず、茫然として答えるすべも知らない」とこのように、「全体作用」とは「本体丸出し」ということですが、西田はこれを瞬間瞬間のアルファでありオメガであるという在り方として「終末論的」としました。こうした境地で説かれるのが、「隋所に主となれば立つ所皆真なり」という事です。西田は「立所皆真」とパスカルの「周辺なくして至る所が中心」ということとの同型性を見て取り、それを「絶対現在の自己限定的に絶対自由」と表現したのでした。全てがこのような成立の仕方をしているため、如何なる行動、如何なる感情、如何なる意志を持ったとしても「逃げたとしても追ってくる神の愛」に包まれているという事になるわけです。

そのような成立の仕方をありとあらゆるものがしている、となりますと、つまり個々別々の存在があると保障した上で、正にその事により、共通の地盤が定まってくる、という意味で、「平常底」と呼ばれるのだ、という帰結になります。こういうわけで、そこに道徳と科学とが共に成立してくると言われる理由も明らかになったのではないのでしょうか。至極当たり前ででありながら、しばしば見失われることであり、逆にこれを見失わないならば、その道が倫理へと繋がるのだと言えます。こうして、個々の倫理思想を研究する意義が確固たるものになります。

この構図は、自愛と他愛の考察の箇所がイメージしやすいと思われます。いわく「自愛といふものなくして他愛といふものはない、しかし真の他愛といふものなくして真の自愛といふものもない。普通には愛といふことを単に自他合一と考へて居るが、その根底には敬がなければならない、単なる自他合一は愛ではなくして一種の衝動に過ぎない。」自愛とは自己限定の際の意志を指すと言われています。⁹

まとめ

このように西田哲学の指向は平常底の思想が示すように、多様で多彩な世界を個として楽しみ、苦しみ、どんなに超脱したとしても、肝心な筋である、と西田が考えた自覚の領野が現にあるという事実から出発することにあると言えるでしょう。この領野は決して到達し得ないものであり存在しないのだ、と対象論理ならば言うでしょう。しかし「存在しないからこそある」というのが平常底の立場です。皆そこにおいてあるのであります。「乗り越え不可能」「乗り越え禁止」とする前に常に既に乗り越えてしまってきたというわけです。対象論理的には如何にしても不可能な事を現に既に我々は日々行っている。そのような立場はただ場所的論理のように、アイデアをこの現場にも包み込もうとする事を日常性として捉えられるもののみが説明できるというのが西田の主張です。そしてこれを捉える必要があるのは、人間存在について考える際に本質的だからであります。ここにこそ自由があります。この意味での自由を見失えばそれは現実的ではなく、科学的学問も道徳も成立し得ません。また、この西田哲学に落とし穴があるとすれば、それは我々にとっても本質的なものである筈です。だからこそ平常底は始めであり終りであると言うのです。この点は従来軽視されてきましたがこれこそ真意です。これからは私達全てが、この西田の真意を反映し活かして行く事ができる自由を手に行っているのだと主張して本発表を締め括らせて頂きます。有難うございました。

¹ 場所的論理的に成り立つとされる世界において成立するとされるのが平常底の立場です。

² 「場所的論理と宗教的世界観」／「第七論文集」所収 初出 1945『西田幾多郎全集 第十巻』2004 岩波書店

³ 「永遠の今の自己限定」／「無の自覚的限定」所収 初出 1932『西田幾多郎全集 第五巻』2002 岩波書店

⁴ 「働くものから見るものへ」序 初出 1927『西田幾多郎全集第三巻』、及び「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」／「哲学の根本問題」所収 初出 1934『西田幾多郎全集第六巻』2003

⁵ Roger Penrose “SHADOW OF THE MIND” Oxford University Press 1994

⁶ 「論理と数理」／「第六論文」所収 初出 1944 『西田幾多郎全集 第十巻』2004 p.81～

⁷ 「場所」／「働くものから見るものへ」所収 初出 1927『西田幾多郎全集 第三巻』2003 その他アリストテレスの基体概念からの着想でもあります。つまり概念自体はどのように古くから指摘されており、西田はこれを「論理」に応用したということが出来るでしょう。

⁸ 「一般者の自己限定」／「一般者の自覚的体系」所収 初出 1929『西田幾多郎全集 第四巻』2003

⁹ 「自愛と他愛及び弁証法」／「無の自覚的限定」所収 初出 1932『西田幾多郎全集 第五巻』2002 岩波書店 p.219